



AUE News

2010年 10月 1日

第 1 号

編集・発行

愛知教育大学広報部会

TEL 0566-26-2738

FAX 0566-26-2500



目次

- 「AUE News」発刊について
- 行事予定(10月)
- トピックス
 - ・韓国・晋州教育大研修の学生ら学長挨拶
 - ・学長,刈谷市選出議員と相次いで懇談
 - ・時衛国准教授が田島毓堂賞受賞
 - ・刈谷市民総踊りに本学学生委員が参加
 - ・東海・北陸地区メンタルヘルス研究協議会
 - ・日本学生対校選手権大会で陸上部活躍
 - ・目からウロコのアート展
 - ・日本植物学会で渡邊幹男教授らが発表
 - ・天文台一般公開
 - ・「摩擦の科学」国際会議を開催
 - ・イギリス留学出発前に学生が学長挨拶
 - ・管弦楽団が訪問演奏会
 - ・「食まるポロシャツ」で食育PR
 - ・理科実験プレ教員セミナー
 - ・日韓併合 100年記念教科書展
 - ・公開講座
 - ・教育実習始まる
 - ・井ヶ谷地区役員と懇談会
 - ・9月卒業式
 - ・「大学スケッチ絵はがき」発売
お知らせ・報告・投稿
 - ・アメリカ・ポールステイト大学留学記
 - ・中国・東北師範大学での職員交流
 - ・「学生FDサミット」に本学学生ら参加
 - ・大学ランキング「資格取得」で本学1位

広報誌「AUE News」発刊について

平素より本誌をご愛読いただきまして、ありがとうございます。

本誌は、国立大学法人愛知教育大学の日頃の教育・研究活動、行事等を1カ月ごとにお伝えする目的で「AUE Monthly」としてスタートしました。構成員の皆様からの記事や情報提供も加わり、一層充実してきております。おかげで、第26号まで継続できました。また、昨年12月からは本学ホームページ上で公開することを試行してきております。

教員養成をはじめとして自然・文化・教育・科学・芸術・技術・スポーツを豊かに探求する総合的な大学として今後も発展を遂げていくには、本学の活動状況をより迅速に学内外にお知らせしていくことが必要になっていきます。

そこで、本誌の発刊を、これまでの毎月1回から、月2回に増やし、毎月1日と15日を発刊日とすることにいたしました。

これに伴い本誌の名称も「AUE News」と改め、心機一転のつもりで編集・発行に取り組んで参ります。また、この第1号をもってホームページ上の正式公開と致します(以上のことは9月13日開催の広報部会でご承認いただきました)。今後とも新しい広報誌をどうぞご愛読ください。
(広報部会長 折出健二)

行事予定(10月)

- 5日(火) 役員部局長会議(13:00~ 学長室)
大学改革推進委員会(16:40~ 第三会議室)
- 6日(月) 教務企画委員会(13:30~ 第二会議室)
学生支援委員会(13:30~ 第五会議室)
- 12日(火) 役員会(13:30~ 学長室)
安全衛生委員会(16:40~ 第五会議室)

- 13日(水) 教育創造開発機構委員会(9:30~ 第三会議室)
 代議員会(13:30~ 第五会議室)
 教育研究評議会(代議員会終了後~ 第五会議室)
- 15日(金) 教職大学院運営協議会(10:00~ 第五会議室)
- 19日(火) 役員部局長会議(13:00~ 学長室)
- 20日(水) 財務委員会(13:30~ 第五会議室)
 教員人事委員会(15:30~ 第五会議室)
- 26日(火) 役員会(13:00~ 学長室)
- 27日(水) 経営協議会(10:00~ KKRホテル名古屋)
- 28日(木) カリキュラム専門委員会(16:40~ 第二会議室)

トピックス

韓国・晋州教育大学校へ研修の学生ら学長に挨拶(9/3)



韓国の交流協定校、晋州教育大学校で9月7日(火)~13日(月)に研修をする本学教員や学生が9月3日(金)、学長室を訪れ、松田正久学長と村松常司理事に出発のあいさつをした。

研修に参加するのは大学院教育学研究科1年生の3人と学部2~4年の9人、教員5人の計17人。研修期間中、同大の大学祭に参加して同

校の学生と交流、同大附設小学校での教育実践(教育実習)、ホームステイ、晋州や釜山でのフィールドワークが予定されている。

メインの教育実践に備えて、8月1日(日)から9月6日(月)の間に、延べ20日間、120時間に及び事前勉強会を実施。4グループに分かれて日本文化を紹介する授業準備や、簡単な韓国語の会話練習を行ってきた。

この日は、研修責任者の江島徹郎准教授(情報教育)をはじめ、教員と学生14人が学長と懇談。学生は「浴衣を着て日本で今、人気の踊りを披露します」などと交流プランを伝えると、松田学長は「今の若い人は韓国ドラマで韓国に親しみを持っているでしょ。一緒になって、仲良くするという雰囲気は大切。今年は日韓併合から100年ですが、これからの世代は国境を越えて交流できるのだから、研修で成果を上げてきてください。そして、日本人が理解できない国境や多様な民族や宗教がそこにどう影響を及ぼしているかを考えて、文化の違いを肌で感じてきてください」と、激励の言葉を贈った。

学長、刈谷市選出県議と相次いで懇談(9/3, 9/6)

住田宗男愛知県議(刈谷市選出、民主)が9月3日(金)、本学学長室を訪れ、松田正久学長と懇談した。愛知県議会議長への要望について説明したいとの学長の意向を受けて県議が来学した。

学長が議長に国立大学の現状を説明し、理解と協力を要請したことや碧海5市市長による本学支援アピール、本学財政の厳しい現状などを示し、来年度予算で国立大学運営費交付金をシーリングから除外するよう要請した。住田県議は「日本は人づくりで生きてきた。優秀な人材を育てていくしかない。教育は国の基本」と理解を示し、学長が「12月の予算案ができるまで楽観できない」と話すと、県議は「教育予算は問題ないと思っているが、お金がないのも事実。対応は団で話を進めてみたい」と述べ、検討を約束した。





また、松田学長は 9 月 6 日（月）、酒井庸行愛知県議（刈谷市選出、自民）を刈谷市内の自宅に訪ね、本学の厳しい現状を説明し、県議会での対応などについて要望した。

松田学長は運営費交付金の削減について「大変な事態で、学生の負担増もあり得る状況。県内 4 国立大学で正副議長にもお願いしたが、県議会超党派によるご協力を願えればありがたい」と要請。酒井県議は「分かりました。運営がここまで大変とは思わなかった。（政府が）教育に重点を

置くのは当然ですが、現実的な手も打たねばならないですね。愛教大が地域で様々な活動をしていることは承知しており、大学が変わってきた印象を持っているが、例えば企業と連携、タイアップして事業をしたりすれば、学生も希望を持って取り組めるのでは。私もできることがあれば協力したい」と述べて、理解を示した。

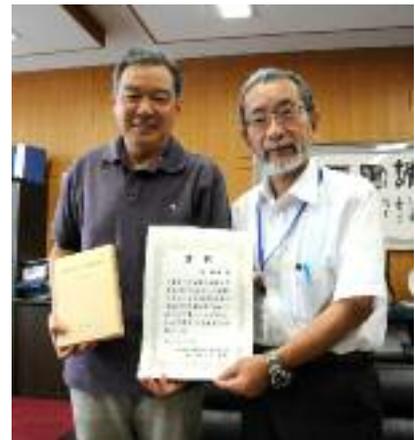
時衛国准教授が田島毓堂賞受賞（9/4）

語彙研究における優れた業績を顕彰する「田島毓堂（いくどう）賞」が今年度は、本学の時衛国准教授に授与されることが決定し、9 月 4 日（土）、名古屋市千種区の愛知学院大学で贈呈式が行われた。

同賞は語彙研究の権威、田島毓堂氏が平成 16 年に創設した公益信託田島毓堂語彙研究基金が、優れた業績のあった研究者に贈る学術賞。毎年、同基金の研究活動顕彰事業として公募、同基金運営委員会が対象者を選考する。今回は、全会一致で時准教授の著書「中国語と日本語における程度副詞の対照研究」が同賞に選ばれ、賞状と顕彰金 50 万円が贈られた。

時准教授は中国・山東省出身。同書は 2001 年の博士論文を基に 8 年間かけて執筆、昨年 5 月に自費出版した。「程度副詞（「もっと」「さらに」など）の中国と日本語での使い方の違いを、多様な例を挙げて丁寧に考察した点などが評価されたのでは」という。同書は今年 8 月、日中の優れた言語対照研究に贈られる「中日対比言語学賞」も受賞、高く評価されている。

16 日（木）には、時准教授が学長室に松田正久学長を訪ね、受賞を報告。松田学長から「おめでとうございます」と地道な研究の成果を祝う言葉が掛けられ、中国語と日本語における変化や使い方の違いについて、しばし談笑。受賞対象になった著作を手に、時教授は出版までの経緯などを語った。



刈谷市民総踊りに本学生協学生委員が参加（9/4）



残暑も厳しい 9 月 4 日（土）午後、刈谷市東陽町・新栄町一帯を会場に「刈谷市民総踊り」が開催され、本学の生協学生委員 14 人と職員 1 人が参加した。

昨年に続き、刈谷市から大学への協力依頼を受けて参加し、清掃ボランティアとして会場の整備に当たるなど、猛暑の中で奮闘した。

また、踊りチームとして、「生協学生委員会」が「エンジョイ部門」にエントリー。パフォーマンスが評価され、「アピール賞」を受賞し、学生たちは踊りきった充実感に満足そうだった。

学生と共に参加した教育創造開発機構運営課社会連携担当職員の張山吉野さんは「本学が地域に貢献する良い機会です。清掃や踊りを通して自ら地域の方々との繋がりを大切



にしようとする学生たちのスタンスにも好感が持てました。今年度でこのスタイルのイベントは終了とのことですが、来年度以降も協力していきたい」と、地域連携の大切さをアピールした。

平成 22 年度東海・北陸地区メンタルヘルス研究協議会(9/9, 10)

平成 22 年度東海・北陸地区メンタルヘルス研究協議会が、本学と独立行政法人日本学生支援機構の共催で、9月9日(木)、10日(金)の2日間、名古屋市千種区の「ルブラ王山」で開催された。

同会は学生たちの大学生活をメンタル面からサポートするための協議組織。今回の参加者は国立大学、公私立大学、短大、高専の教職員計104人で、「未来に希望を持てるキャンパスライフ」をテーマに、講演・分科会等での研究協議を行った。



開会式では、本学の村松常司理事による開会の辞に続いて、日本学生支援機構の山内兼六理事と本学の松田正久学長が主催者としてあいさつ。

松田学長は「多様化複雑化していく様々な学生をキャンパスに迎え、教育を通じて社会に貢献する社会人として付加価値を付けて送り出すという大学のミッションを達成するために、本協議会が重要な役割を果たしていることを頼もしく思っています。一人ひとりの学生と真摯に向き合い日々努力をされている出席者の皆様に感謝申し上げるとともに、協議会で得られた成果をそれぞれのキャンパスに持ち帰って尽力されますことを心から願っています」と述べた。

基調講演では、同協議会東海・北陸地区実行委員会の地区代表委員で名古屋工業大学保健センター長の粥川裕平教授が「銀幕にみる青年期心性」と題した、映画内容の中でみる精神科医療についての講演。趣向を凝らしたレクチャーで参加者を楽しませた。

次に、管理者や教職員を対象とした全学の問題、高専での学生支援、事例検討、システム構築論、コミュニケーション演習の5分科会が開かれ、活発な意見交換や討議が行われた。

懇親会には希望者45人が参加。プロのジャズ演奏によるライブと本学落語研究会のメンバーによる漫才やコントが披露され、音楽と笑いで場内の空気を和ませた。

2日目の後半には、全体会議として各分科会から報告が行われた。閉会式では本年度の同会委員長で本学保健環境センター、岡田曉宜准教授が閉会の辞を述べ、来年度同委員長となる福井大学保健管理センターの細田憲一准教授があいさつして協議会は閉幕した。



日本学生対校選手権大会で本学陸上部活躍(9/10 - 9/12)

学生陸上競技の国内最高峰を競う「陸上日本学生対校選手権大会」(日本学生陸上競技連合主催)が9月10日(金)~12日(日)、東京・代々木の国立陸上競技場で開催され、女子棒高跳びで渡邊みなみ選手(体育・大学院1年)が3位に入賞、男子400mで本学陸上部の中野弘幸選手(体育4年) 次頁写真=外から2人目 が4位入賞するなど活躍した。



渡邊選手の今回の記録は、3m70。自己ベストの3m90には及ばなかったものの、「実力を発揮した」と陸上部顧問の筒井清次郎教授(体育教育)。また、中野選手の記録は47秒02で、「高校時代は全国400番ぐらいだったのが、大学で大きく伸びた。ミラクルと言ってもいいくらい」(筒井教授)と同陸上部で飛躍的に成長。同大会に続き、山梨県で開催の国体にも愛知県代表で出場する。

そのほか、メインイベントの男子4x400mリレーは、記録は予選7位だったものの、強豪が多い組に入ったため順位的には9位で、8位までの決勝には進めなかった。女子4x400mリレーは10位、

女子 4×100mリレーは 10 位，女子走り幅跳びは 9 位と，あと少しというところで入賞を逃した。

今大会，陸上部からは在籍 103 人中，男子 13 人，女子 16 人，計 29 人が出場するなど，「毎年、少しずつ多くなっている」と筒井教授。その強さの理由を「いい指導で、選手が自分で考えて練習して成果を上げ，結果を残す。それにより，さらにいい選手が入ってくるという循環が，ここ 10 年ほどででき上がった」と分析。今後の活躍がますます期待される。



目からウロコのアート展 (9/10 - 9/20)



本学学生らが企画した展覧会「現代アート 目からウロコのアート展」が 9 月 10 日 (金) ~ 20 日 (月)，刈谷駅近くの「スペース Aqua ふれあい交流広場」で開催された。

同展は，刈谷市制 60 周年記念事業で，駅前商店振興組合と本学のコラボ事業としては第 53 弾の地域連携の催し。出展作品は，美術教育の加藤マンヤ講師と美術科 2 年生 11 人の計 23 点。学生たちは前期の授業で制作した作品をリメイクして臨んだ。

既製品をちょっと加工して，世の中の常識や視点を変えてみるというのがテーマ。注ぎ口にトランペットが付けられた笛吹きケトル，9 ミリごとに 1，2，3 と数字の入った定規，口と鼻だけしか隠さないならその部分だけ覆えばいいという発想から生まれたマスクなど，ユニークな作品が並び，訪れた人々の目を楽しませた。



出品した学生は「自分たちで作品を作り，空間を完成させて嬉しいですが，思いを伝える難しさも実感しました」「身近に当たり前にあると思っていたものが，当たり前でなかったと感じてもらいたい。一人よがりではなく，他人に分かってもらうにはどうしたらいいか考えることが必要だった」と，発表の場を意識して作品や会場作りの仕方を学んだという。



11 日 (土) 午後には，加藤講師が「こんなアートありますか？」と題したトークショーを実施，一般や学生など 20 人余りが参加。スライドを使って，マルセル・デュシャンやアンディー・ウォーホール，村上隆など，既存の概念に挑んだ現代アートの作家作品や制作意図，多様なアートの在り方などが紹介された。

日本植物学会で渡邊幹男、芹澤俊介両教授が発表 (9/11)

日本植物学会第 74 回大会が 9 月 11 日 (土) に春日井市の中部大学で開催され，公開シンポジウムで本学の渡邊幹男教授 (理科教育)，芹澤俊介教授 (同) が発表し，出席者と議論を行った。

シンポジウムのテーマは「生物多様性研究の現状と課題 生物多様性って何?」。生物多様性とは何か，どういう研究が行われ，現在の課題は何なのかを，植物研究者の立場から客観的に，かつ分かりやすく解説。多様性研究において世界の第一線で活躍する講演者も登場，研究者や一般の計約 300 人が耳を傾けた。

渡邊教授は前半の座長を務めるとともに，愛知県の植物トピックスとして「有名な植物も意外

に分かっていない ナガバノイシモチソウとシロバナナガバノイシモチソウ」「あたりまえの植物もよく調べると... 雑種性セイヨウタンポポ」「地理的変異に見る進化の歴史 シデコブシとミカワチャルメルソウ」の3題をレクチャー。

芹澤教授は「愛知県の植物多様性 市民参加の調査と最近認識された新種の植物」と題して、本学を拠点とした自然調査の成果などを発表。現在までに約 12 万点の標本資料が蓄積され、植物群の調査に役立ったが、分布が複合化する中で、さらに多くの人に調査に参加してもらう必要があるなどと今後の課題も訴えた。

講演の簡単な内容はホームページで閲覧ができる。

【<http://bsj.or.jp/bsj74/index.html#18>】

また、10月25日(月)、26日(火)には生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)に併催して行われ「生物多様性交流フェア フォーラム」が名古屋学院大学(名古屋市)で開かれ、渡邊教授による講演が予定されている。入場無料、事前登録。



天文台一般公開(9/11)

本学天文台で「第58回一般公開」が9月11日(土)午後6時~8時30分に、自然科学棟地学系理科実験自習室と天文台で開催された。

講座前の観望会を始める午後5時30分ごろに空が曇り、望遠鏡をのぞいても白い雲しか見えない状況でスタート。それでも、一般の41人の参加者が訪れた。

同6時からの天文ミニ講座では澤武文教授(理科教育)が、「日時計の原理」について講演。日時計は太陽

光の影を時計として利用するもので、最も古い時計の一つであること、時刻は太陽が真南に来た時を正午とし、1日を24時間として時刻を定義すること、四つの基本的な日時計があることなどを、画像を使って分かりやすく説明した。



午後7時からの観望会では当初「半月状の金星を見よう!」が予定されていたものの、雲で金星と月は見えず。そこで急遽、雲の薄くなったところから姿を現したベガを観察することに。その後、木星が雲を通して見えるようになり、星の観察を諦めていた参加者から「木星の縞模様や、横に並んだ二つの衛星が見える」と歓声が上がった。

また、この日は天文愛好会COREの有志によるプラネタリウムの上映もあり、多くの参加者が宇宙のドラマを楽しんだ。

次回、第59回天文台一般公開は、「第4回科学・ものづくりフェスタ@愛教大」に合わせて、11月6日(土)午前10時30分~午後8時に開催。詳細はホームページを参照。

【<http://tenmon.phyas.aichi-edu.ac.jp/>】

「摩擦の科学」国際会議を開催(9/13-9/18)

本学主催による、「摩擦の科学」に関する国際会議「International Conference On Science of Friction(ICSF)2010」が9月13日(月)~18日(土)、三重県志摩市の「合歓の郷」で開かれ、国内外からの研究者100人余が参加して意見を交換した。

同会議は物理、機械など広範囲な分野の専門家が「摩擦」をテーマにそれぞれの研究を確認し、情報交換することを目的としたユニークな国際会議で、今年が4回目。



13日(月)午後6時からのウエルカムパーティーは主催者を代表して本学の松田正久学長があいさつして、開幕した。

14日(火)からは、超潤滑グリース、オイルでエネルギーロス

防止を研究する本学の三浦浩治教授(理科教育)をはじめ、アメリカ、ドイツ、フランス、日本の招待講演者23

人が、「超潤滑と摩擦」「分子モーターと摩擦」「摩擦とカオス」などを趣旨とした発表を行い、原子スケールから地球規模まで広範囲にわたる摩擦についての研究が紹介された。



イギリス留学出発を学長にあいさつ(9/15)

この秋からイギリスの本学協定校に留学する学生たちが、9月15日(水)午前、学長室を訪れ、松田正久学長と村松常司理事(学生担当)に出発のあいさつをした。

留学をするのは、現代学芸・国際文化コース3年の山本美紗子さん、石原佳世さん、山賀奈々子さんと、中等教育・英語専攻3年の林知世さん、初等教育・国語選修3年の石川結希さんの5人。ともに、イギリス第二の都市・バーミンガムにあるニューマン大学で約1年間、英語などを学ぶ。

山本さんらは「英語の勉強をしながら、小学校にボランティアに行きたい」「困った時には、5人で助け合います」などと、それぞれ抱負を語った。

松田学長は「英語には自信はある? 向こうの学生は自己主張が強いから、あると言った方がいいよ」「英語が上手くなるには、日本人と話さないことが秘訣」「バーミンガムにはローマ時代の城壁がある。文化や歴史の勉強もしてくるといい。自分づくりをするのが大学。イギリスの文化に触れて自分づくりをしてきてください」などとアドバイス。さらに、「無茶だけはしないように」と留学中の安全を気遣った。

山本さんは本学教育研究基金海外派遣留学の奨学金を利用、他の4人は自費留学。例年、同大学への留学生枠は年間3人だが、今回は初めて5人の留学が認められた。

5人は9月17日(金)に日本を出発。現地では下宿生活をしながら、来年8月までの留学生活を送る。



管弦楽団が訪問演奏会(9/15, 9/18)

本学管弦楽団が9月15日(水)に岡崎市立愛宕小学校で、18日(土)に「みよし市総合福祉フェスタ ふれあいコンサート」で訪問演奏会を行った。

15日は午後2時から同小体育館で、全校児童149人を前に、ドボルザーク作曲「スラブ舞曲第1番」、ハチャトリアン作曲「ガイーヌから『剣の舞』」「ディズニーアドベンチャー」

「サウンド・オブ・ミュージック」など7曲を演奏。同小の要望で、団員がオーケストラ版に編曲した校歌の演奏も。児童たちは校歌を口ずさんで、コラボレーションに大喜びだった。演奏の合間には各楽器の特徴が紹介されたり、アンコールで「となりのトトロ」から「さんぽ」が演奏されると、指揮に「サプライズゲスト」の同小・増澤徹校長が登場するなどして、ユニ



ークな企画で会場を沸かせた。

18日(土)午後2時30分から「みよし市総合福祉フェスタ ふれあいコンサート」(みよし市、みよし市社会福祉協議会・主催)に出演。平成10年度から連続出演で、今回が13回目。同市文化センターサンアート・大ホールで、クラシックやポピュラーソング6曲を演奏し、520人の来場者を楽しませた。途中、みよし少年少女合唱団と観客が歌詞を手話で表現しての“共演”や、客席の子どもたちがオーケストラのメンバーに混じって演奏するコーナーなどもあり、会場は終始和やかな空気に包まれていた。



「食まるポロシャツ」で食育PR(9/15)

本学生まれの食育キャラクター「食まるファイブ」をアピールする「食まるポロシャツ」が制作され、9月15日(水)から職員有志が着用して学生へのPRに一役買っている。



食まるポロシャツは、白地にブルーで食まるのキャラクター「りきまる」「ベジまる」「にくまる」「フルーツまる」「ほねまる」がバックプリントされ、フロントにも左胸部分に食まるがプリントされている。「食まるファイブ」は、2006年に本学の西村敬子教授(家政教育講座)が研究室の大学院生と「栄養バランスガイド」制作にちなんで考案したのが始まり。キャラクター誕生以来、Tシャツやエコバッグ、絵本などの“食まる

グッズ”が次々に作成されて、地元刈谷市などの幼稚園や小中学校での食育活動に利用されるなど、食生活改善推進委員の支持も得てきた。また、本年度からは愛知県が食まるファイブのキャラクターを活かして、県内の小学校で食育劇を上演するなどの広がりを見せている。そんな中、さらに将来の食育を担う本学の学生たちにも「食まるファイブ」をもっと知ってもらい活用してほしいと、PR用のポロシャツが登場した。

“生みの親”の西村教授は「これまで子どもたちへのアピールなどをしてきて、知名度がアップ。今度は愛教大の学生にもっと興味をもってもらえると嬉しい」と、職員へポロシャツ着用の協力を要請。学生との接触が比較的多い学生支援課、教務課、創造科学系事務室などの賛同者約50人が、これに応じてポロシャツ着用で業務に当たっている。着用する職員は「着ているだけでアピールできます。着心地もよくて、業務もスムーズにできます」と評判も上々。

着用は毎週水曜日と「食育の日」の毎月19日、クールビズ期間の10月末まで続けられる。

PRのためのポロシャツ着用は、愛知県農政課の職員13人にも協力を要請、県庁での業務の際に使用されている。



理科実験プレ教員セミナー(9/21, 9/22)

教員になる学生の理科の指導への不安を少しでも解消しようと、理科を専門としない学生でも理解できる「理科実験プレ教員セミナー」が9月21日(火)、22日(水)に自然科学棟の理科実験・実習室で行われた。

科学技術振興機構と国立教育政策研究所が実施した2008年度「小学校理科教育実施調査」によると、学級担任として理科を教える教員の約5割が理科の指導に苦手意識を、また、約7割が指導に必要な知識・技能の不足を感じていると回答するなど、教員の理科離れは近年深刻な問題になっている。そこで、本学ではそんな学生たちをサポートしようと、昨年度から同セミナーを開講。新学習指導要領で新たに扱われる内容や、小学校教員として知っておかなければならない



ことに絞って、実験・観察を中心に実践的な内容を学んでもらおうと本学理科教育の教員が実施している。

21 日午前は地学実験講座が開かれ、「月の満ち欠け」について、澤武文教授が指導。月の形と見える時刻、位置について理解してもらおうという内容。1 年から大学院生まで計 39 人が参加。月に見立てたボールに光を当てて、太陽と地球の位置関係や見える形を確認する実験を行った。午後は物理実験講座では、岩山勉教授が

「電気の利用」と題して、コンデンサや発光ダイオードの活用方法についてレクチャー。

22 日午前は生物実験講座「メダカと昆虫の観察・指導」を澤正実教授が、午後は化学実験講座「化学薬品と実験器具の取扱い方」を日野和之講師が、それぞれ指導した。

参加した学生は「生物専攻ですが、それ以外は高校でも授業を受けていないので不安。この機会を利用して必要な知識を身につけたい」「理科は苦手ですが、教員になったら知らないでは済まされない。こういうセミナーがあるのは、ありがたい」と、レジュメにメモを書き込むなどして、真剣な表情で受講していた。



日韓併合 100 年記念教科書展 (9/21 - 10/31)

日本と韓国の併合 100 年を記念した企画展示「日韓併合 100 年記念を植民地朝鮮の教科書でふりかえる」が、附属図書館 2 階のアイ♥スペースで 9 月 21 日（火）から始まった。



今年が日本が大韓帝国を併合した 1910 年から数えて 100 年に当たる年。日本の植民地朝鮮統治について、「創氏改名」「国語（日本語）教育」「皇民化」といったキーワードで語られることがほとんどだが、その具体的な内容はあまり知られていないのが現実。その中の「国語（日本語）教育」に焦点を当てたのがこの展示会。会場には当時の教科書など 25 点を展示。35 年足らずの間に教科書は 5 回作り換えられ、併合前に行われていた「日語」教育を含めれば 6 種類に大きく区分されている。「旧学部期」「朝鮮第 1 期」...とコーナーが分けられ、それぞれの特徴を紹介。日本語教授法の発達と教科書の変遷を見ることができる。展示のほか、国語読本の模範朗読のレコードの試聴や、1940 年代の植民地下の朝鮮で制作・上映された映画の DVD の視聴も可能。

展示を企画したのは上田崇仁准教授（日本語教育）。「国語（日本語）教育は、名前こそ国語ですが、実態は日本語を母国語としていない児童生徒に対する一斉授業方式の日本語教育だった。それが、どのような教材を使って、どのように展開していったのかを教科書から、まず知ってほしい。日本と朝鮮半島とのかわりを、表面的なことだけでなく、より具体的に知ってもらえたら嬉しい」と多くの人の来場を呼びかけている。展示は 10 月 31 日（日）まで。



公開講座「女性作家の短編を読み解く」(9/25)

本学公開講座「女性作家の短編を読み解く」が 9 月 25 日（土）午後 4～6 時、刈谷市総合学習センター 501 講義室で開講された。

公開講座は本学が地域貢献に開催している一般を対象にした講座。この日は「女性作家の短編を読み解く 向田邦子、江國香織、その他」と題した、2 回シリーズの 1 回目。佐藤洋一教授（教職実践講座）の指導で、現代女性作家の短編小説を“文学の秋”にちなんで、楽しく読み解



こうという内容。一般や大学院生など9人が参加した。

冒頭、佐藤教授が、社会の変化などで“少女性・女性性”が顕著になった1980年代の作家登場についてレクチャー。少女マンガ黄金期(70~80年代)に江國香織や山本文緒、吉本ばななら現代女流作家が大きな影響を与えていたことなどを紹介し、現代女流文学の特徴などを説明した。

さらに、向田邦子作の短編「大根の月」「ごはん」を例に、「時代と人間を浮かびあがらせる小説の技術」(佐藤教授)を、向田作品の優れた描写力から検証。現在と回想部分の巧みな構成や、言葉や表現一つひとつに込められた意図や思いを、ゆっくりと読み解いて作品への理解を深めた。

受講生は「一人では読み飛ばしてしまったことも、こうやってゆっくりと読むことで意味を持っていたことが分かった」「新鮮な体験。向田作品を読み直してみたくなった」など、それぞれ物語を“読み解く”楽しさを体験した。2回目の講座は10月9日(土)に行われる。

教育実習始まる(9/27-10/22)

教育実習が本学附属学校などで9月27日(月)から始まり、学部3年生と大学院2年生、特別専攻科の学生らが、教育現場を体験している。

今回の実習生は小学校482人、中学校186人、幼稚園21人、高等学校8人、特別支援学校20人の計717人。27日から10月22日(金)までの4週間に基本期間に、教員免許取得を目指して、附属学校や協力校での実習に臨んだ。



このうち、岡崎市にある本学特別支援学校では、特別専攻科の学生が2週間の実習を行っている。9月28日(火)には全校集会の後、小学校1年から高校3年までの全学年60人を縦割りにして班ごとに活動する「仲良しタイム」で、初等部に配属された実習生たちは動物の着ぐるみを着て登場し、体操やボール遊びで、子どもたちと一緒に体を動かした。その後は、それぞれの教室に分かれ、塗り絵や学科の授業に参加した。

実習生たちは「想定した通りには、全然、子どもたちが動かない。そのため、いろんな想定をしていますが、何をしたいのか難しい」「まだ日も浅いので、手さぐりの状態ですが、2週間ですできるだけたくさん学びたい」と、慣れない現場に戸惑いながらも、子どもたちとの触れ合いに意欲満々。実習期間の後半には、公開授業にも挑戦する。

井ヶ谷地区役員との懇談会(9/28)

刈谷市の井ヶ谷地区会役員と本学の懇談会が9月28日(火)夜、本学の第一福利施設2階、ハンズで開催された。会には近藤学井ヶ谷地区長はじめ各役員と本学からは折出健二理事はじめ各理事、学系長や学長補佐ら計約30人が出席した。

折出理事が「学生が人生の大事な時期をこの地域で過ごし、皆さんにも成長していく姿を見ていただいていると思います。キャンパスの自然も色づき、秋の気配を楽しんでいただきたい。一方、本学にとって来年度予算が厳しい状況だが、国立大学は必要という声が地域から上がると私たちの力になります。ご理解をお願いしたい」とあいさつ。近藤地区長は「愛教大なくして町の発展はあり得ない。子どもまつりなどに参加し、私にとって最も身近な大学。今日の会を有意義なものにしたい」と述べた。





続いて横地正喜理事が「1000人弱が地域に下宿している。苦情は少なくなっているが、防犯カメラによる学内の安心、安全に務めてきました。今後も皆さんの意見を聞き、地域との関係をいい方向にもっていきたい」と現状を報告し、懇談会に移った。出席者らは食事をしながら本学周辺の景観や学生の行動などについて意見を交換しながら和やかに懇談した。

9月卒業・終了式(9/30)

平成22年度の9月卒業式が9月30日(水)午前10時30分から、第三会議室で挙行された。

対象は学部学生16人、大学院生2人の計18人。山本良夫総務課長の開式の辞に続いて、松田正久学長が登壇し、一人ひとりに学位記を授与した。学長は「卒業、修了はゴールであると同時に新たなスタートです。それぞれの人生を一步一步、歩んでいただきたい。大学院修士課程を修了されたお二人は外国の方。日本語で修士論文を仕上げ、その後試験に合格されたことは本当に大変であったと推察します。本学の学びの中で、充実した学生生活を送られたことと思います。卒業された後も、本学に思いを寄せてほしい。OECDのデータでは加盟主要28カ国の中で日本の国内総生産に占める教育機関への公的支出は28位。運営費交付金を削減することになり、これを増やすために国民の声を聴くためのパブリックコメントに協力していただきたい。皆さんの今後の活躍が、本学の、そして日



本や世界の今後を支え、改革する力になると確信しています。今後のご活躍を祈念いたします」と述べ、18人を祝福した。



卒業生を代表して、教育学部代表、近藤和渡さん(初等教育教員養成課程)と大学院教育学研究科代表、フランシスカさん(社会科教育専攻)がそれぞれ、「社会の幅広い分野で活躍していきたい」「大学院で学んだことを生かして社会に貢献していきたい」と今後の活躍を誓い、式を終了した。

「大学スケッチ絵はがき」発売(10/1)

村瀬康司さんが描いた本学のスケッチ画の絵葉書セットが10月1日(金)、本学生協で発売になった。

スケッチ画は大学構内の風景をペンと水彩で描いたもの。安城市在住の村瀬さんが、本学松田正久学長と今年1月に偶然出会ったのをきっかけに、大学の風景を描き始め、今年7月には附属図書館で展覧会を開催。展示した22作品の中から来場者が人気投票して選んだ4作品を、大学の提案で生協が絵葉書にした。



4枚セット、200円で、限定400セットを販売。同生協の白取義之専務理事は「かさばらないので携帯に便利。実習先などへのお土産やお礼に利用してほしい」とアピール。

また、大学も、このハガキセットを来外者への記念品として進呈するなど、本学のPRに活用する。

お知らせ・投稿・報告

アメリカ・ボールステイト大学留学記 (投稿)

こんにちは。アメリカのボールステイト大学に交換留学をしている障害児教育4年の林真智子

です。

こちらへ来て3週間が経ちました。この3週間は、長かったような、短かったような、不思議な感じ。中国・韓国・メキシコ・フランス・イタリア・サウジアラビア・トルコ・フィンランドなどなど様々な国からの留学生と出会い、また、アメリカ人の友達もたくさんでき、毎日充実した日々を送っています。こちらへ来てすぐの頃は、本当に分からないことだらけでしたが、ようやく慣れてきたように思います。

大学の規模がかなり大きく、学内をシャトルバスが走るほどで、私はまだ学内地図が手放せません。食事はいくつもある学食をまわって食べていますが、ハンバーガーやピザを週に3回ずつ以上は食べている気がします。



この大学では、多くの学生が寮や学内のアパートで生活しています。私は寮の二人部屋に住んでいて、ルームメイトはメキシコ人です。彼女の専攻は建築やデザインで、よく専攻の話の話を聞かせてくれます。彼女の英語はとても流暢なので、私も早く彼女に近づきたいです。

私の専攻は特別支援教育ですが、英語の力が足りないと言われ、今学期は英語コースをフルタイムで受講しなければなりません。本当は最初から専門の授業を受けたかったので、不本意で自分が情けないですが、来学期、専門の授業を理解できるように今は英語のスキルアップに励んでいます。英語コースでは、アカデミックな英語（リサーチペーパーやサマリーの書き方など）を学んでいて、周りの留学生のレベルも高く、宿題も莫大です。これらは必ず自分の力になり、来学期に生きると思っています。

それでも特別支援教育の授業があきらめきれなかった私は、Special Education の学部長先生にお願いをして、入門の授業を非公式に聴講させてもらえることになりました。授業ではやはり英語についていけず、ところどころ理解できるという状況ですが、来学期への良い準備になると思っています。

課外活動では、先週、Student Council for Exceptional Children, ASL(American Sign Language) Club, Japan Club のミーティングに参加しました。3つのクラブを掛け持ちすることは大変かもしれませんが、出来る範囲で積極的に参加したいと思っています。

新しい友達と出かけたり、パーティに行ったりと、アメリカの大学生活も今のところ思いっきり楽しんでいます。寝る時間が惜しいくらい毎日が充実していると思います。友達の写真を何枚か添付するので、ぜひご覧ください。



こちらはもう朝晩は長袖を着ても肌寒いほどです。明日の天気予報を見ると、最高気温30度、最低気温12度です。一日の寒暖の差が激しいので、風邪をひかないように気をつけたいと思います。
(障害児教育4年 Ball State University 交換留学生 林真智子)

中国・東北師範大学での職員交流（投稿）

8月31日から9月10日までの11日間、職員交流プログラムで中国・東北師範大学に滞在しました。この場をお借りして報告します。

研修内容

東北師範大学は、中国北部の長春市にある中国3大師範大学の一つで、平成22年4月に本学と学術交流協定を締結したばかりです。プログラムでは、国際交流担当部署の職員との意見交換、本学の紹介、キャンパス及び周辺施設の視察、中国語授業体験、中国人学生及び日本人留学生との交流を行い、大学の施設・設備、国際交流に関する組織、交流状況等について知見



を深めました。

印象に残ったことは、東北師範大学が驚くほど国際交流を活発に行っていたことです。国際交流担当部署のほとんどの職員は他言語（ロシア語、韓国語、日本語、英語など）が堪能で、韓国人学生受け入れ担当職員は「明後日から北朝鮮に出張」とのこと。日本の大学とも多種多様な学生交流プログラムを実施していました。本学も昨年 10 月に国際交流センターを設立しましたが、海外から見るとまだまだ小規模だと思い知りました。東北師範大学で勉強したことを本学の国際交流事業の推進に役立てたいと思います。

長春の町並み

私の中では中国はせせこましいイメージがありましたが、長春はそのイメージと違い、建物も道も大きく綺麗でした。大学から徒歩 15 分ほどの桂林路という繁華街には、雑貨店やカフェ、美容室、パン屋、ファッションなどのお店が建ち並んでいます。ケンタッキー、マクドナルド、サブウェイもあります。ご飯は、油と塩は多めですが美味しくて安いです。大学の食堂だと一食 5 元（約 65 円）程度、桂林路のレストランでも 23 元（約 300 円）程度でした。ただし、道路は車が多く交通ルール無視には恐怖を感じました。車優先のため、安全地帯でも横断歩道でも関係なく車が突っ込んできます。道を渡るときは、信号ではなく車を見て渡ります。



長春での生活

東北師範大学での留学生活は、午前中は中国語授業、午後はオプション授業（一部有料）が受講可能です。中国語授業はレベル別に 7 クラスあり、私は一番初級のクラスを聴講しました。受講者 10 人で、国籍はイタリア、ロシア、モンゴル、インド、スペイン、インド、韓国、日本。この授業で各国の友達がつくれそうです。東北師範大学には 500 人以上の留学生在籍しています。研修は 30 人ほどですが、日本人同士の繋がりや助け合っているようです。東北師範大学には日本語を話せる中国人学生もいます。私が紹介してもらった中国人学生は日本にとっても関心があり、本学の交換留学制度にもたくさんの質問が寄せられました。日本人と交流する機会が滅多にないらしく、研修外でも快く街を案内してくれました。せっかくだだったので日本人学生も誘い、一緒に卓球をしたり、汽車に乗ってハルビンに行ったりと交流してきました。学生同士は語学相互学習を行う約束をしていました。是非本学に留学に来て欲しいです。



研修を受けて良かったこと

海外生活の大変さを肌で感じることができました。幸いなことに職員や学生がとても親切にしてくれたので、不自由は全く有りませんでした。私は中国語が話せないで余計にかもしれませんが、日本では当たり前な日常生活も想像以上に困りました。また、両替やパスポートの保管など、海外ならではの問題もありました。しかし、だからこそ、留学生は何を求めているかを私なりに気付くことができました。東北師範大学の皆様そして愛教大の皆様、この職員交流プログラムを受けさせていただき、心から感謝いたします。この貴重な経験を今後の業務に還元したいと思っています。



（教育創造開発機構運営課国際交流担当 山内 茜）

「学生 FD サミット 2010」に本学学生ら参加（投稿）

7 月 27 日に正式に発足した本学の学生・職員参画型 FD 活動組織「愛教大 CoNandE 委員会」（通称「あいこね委員会」）は、その最初の活動として、8 月 28 日（土）、29 日（日）の両日に、京都の立命館大学で行われた「学生 FD サミット・2010 夏」に参加した。このサミットは、立命館大学の木野茂教授を中心として組織された「立命館学生 FD スタッフ」の企画で昨年夏から始

められたもので、本年2月の第二回に続き、第三回目のものである。参加大学、参加学生・教職員の数は、回を追うごとに急増して、今回は38大学、200人以上の参加者を見ている。このサミット集会の趣旨は、通常は大学教員の義務と考えられているFD活動を、その受益者である学生や協力者である職員にまで拡大して、彼らの生の声を聞き、各大学で行われている改善活動を参考にして、自大学でも学生を中心としたFD活動に生かす、というものである。筆者が第二回目の冬のサミットに一人で参加したときに受けた強い印象は忘れがたく、是非本学においても学生・職員参加型のFD組織を創成して、学生と共に参加しようとして計画したことが今回実現をみたわけである。



現在のあいこね委員会のメンバー数は21名であるが、そのうち13名が今回の学生FDサミットに参加し、一大学の参加者数としては最大で、主催者側としても快挙との評価が高かった。しかし本学の場合、参加者数が最大であっただけではなく、サミットの目玉である二日目のグループワークにおいて、そのコーディネータとして選出されたものが、1年生を含めて、4人もいたことは誇りとしてよいことである。学生FDサミットの父とも言われる立命館大

学の木野教授の最後の講評で、今回のサミットで最も強い印象を受けたグループとして取り上げられたことは本学の名誉であろう。

第一日目のサミットの内容としては、まず全員による自己紹介である「オープニング」から始まり、アイスブレイクとしての「サミット交流タイム」、昼食を挟んで午後は木野教授と学生代表によるミニトーク「学生FDとは」から始まり、＜大学教育の意義＞を総合テーマとした「しゃべり場（学生だけのグループ討議）」、懇親会という順序であった。二日目は、各大学の「学生FD取り組みの紹介」が行われ、そのあと、昼食時間を取り込んだ形のグループワーク「大学教育の意義」が各小テーマ別のグループに分かれて行われた。小テーマとしては、1.大学の教育と高校までの教育、2.どんな授業を望んでいる？3.学生生活を充実させるには？4.成績評価についてどう思う？5.大卒ってなんだろう？という5つのテーマがあった。ちなみに、今月9月24日に行われた本学参加者による総括の会では、成績評価に関するグループでの討議が最も盛り上がった印象を受けた。このグループワークを受けて、各グループの代表者（コーディネータ）がグループでの討議をまとめて発表したわけであるが、そこにおいて本学学生が4人も発表者になったわけである。



このサミット参加の意義を一言でまとめるのは難しいが、何と言っても、参加学生が他大学の学生と大学教育の意義と現在の問題点を真剣に議論する機会を得たことが最大の収穫ではないだろうか。このような熱い議論の場に本学の学生13名が積極的に参加して交流を始めたことは、今後の本学のFD活動のみならず、学生たち全員の生き方に大きな意義を持つことになる。最後の全体での写真撮影のあとも、各グループでの仲間たちとの連絡先の交換など、名残尽きない時間があったことがそれを証明していると思う。

(社会科教育教授 大澤秀介)

大学ランキング「資格取得」で本学1位(投稿)



(株)リクルートが毎年行っている「進学ブランド力調査2010」の結果が、『リクルート カレッジマネジメント』164号(2010年9月・10月合併号)に掲載されました。東海エリアの高校生が自エリア82校、関西・関東エリア計126校を対象に、知名度・志願度・イメージについて答えたもので、有効回答2,861件(男子1,364,女子1,497)のデータが詳細に記されています。

愛知教育大学は、「知名度」では三エリア全体の上位

15位には入りませんでしたが、女子で見ると「興味度」「志願度」のいずれでも14位にあがっています。イメージの項目別で見ると、「資格取得に有利である」で本学が東海エリア全体で、去年に続いて連続第1位にあがっています。

東海エリアの男女をあわせた全体で上位10位以内に本学があがっている項目は、以下の通りです（同上誌24～29ページ）。

- 「専門分野を深く学べる 第4位」
- 「教養が身につく 第6位」
- 「卒業後に社会で活躍できる 第7位」
- 「入試方法が自分に合っている 第7位」
- 「就職に有利である 第8位」
- 「教育方針・カリキュラムが魅力的である 第8位」
- 「学費が高くない 第9位」

同誌のコメントは、今回は全エリアで東京大学が第1位を占めており、各エリアにおける大学イメージの浸透のさせかたに課題があるのでは、と書いています。先日（9月26日）、河合塾でおこなわれた東海北陸地区の国立大学説明会で筆者は本学紹介のプレゼンを担当しました。それまで会場の参加者が少なかったのに、本学の紹介を始める時になると急に増えてほぼ大講義室いっぱいになりました。教育大学の志願者増の傾向を実感した次第です。（K.O.）

編集後記

「AUE News」となり、これからは月2回の発行で、学内のニュースもこれまでより少し早くお伝えできることになりました。しかし、半月に1度の頻度はまだまだ、のんびりスペース。さらにスピードアップできるようにピッチを速めていきたいと、編集スタッフ一同、鋭意、努力していきます。また、本誌は教職員、学生の皆さんからの“声”を伝える場でもあります。AUEの仲間として、共有したい情報や留学記、研修報告など投稿も歓迎します。今回、取材した本学公開講座「現代女流作家の短編を読み解く」は素敵な講座です。言葉や表現一つひとつの力を改めて思い知らされました。“読書の秋”，講座で再認識した表現力豊かな女流作家の作品に、この秋はとっぴりと浸ってみたいと思う今日この頃です。（K）

投稿のお願い

学内外の出来事（教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など）に関するニュースの提供をお待ちしております。

メール：kouhou@m.auecc.aichi-edu.ac.jp 編集責任者：総務担当理事 折出 健二